

「心は燃えていたではないか」

ルカによる福音書 24 章 13～35 節

聖学院大学 欧米文化学科准教授 島田由紀

初めて教会に通い聖書を読み始めた大学生の頃、聖書にはわけのわからない物語や教えがたくさんあると感じました。ルカによる福音書に収められている復活のイエスのエマオの物語もその一つでした(ルカ 24:13～35)。イエスが十字架につけられて殺されて復活した後に旅をする弟子たちと一緒に旅をした、弟子たちはあとになってからそのことに気づいた、という物語です。そもそも復活ということがよくわからずにいました。「殺されても復活する、スーパーマンみたいなイエスって言いたいのか?」と当時は思いました。腑に落ちないまま、若かった私の心を通り過ぎていった物語でした。

話は変わりますが、留学時代、私はアメリカに留学させていただいたのですが、ヨーロッパ方面へも何度か訪れる機会が与えられました。あるとき、フランスのパリで一泊する機会がありました。奨学金生活のカツカツの貧乏学生のこと、華やかな観光旅行などできません。どこか一、二か所をじっくり見ようと思いました。パリに行ったことのある友人に尋ねると、「ルーブル美術館やオランジェリー美術館も良いけれど…」と言って薦められたのが、ジャックマール・アンドレ美術館でした(英語公式サイトは、<http://www.musee-jacquemart-andre.com/en/home>。日本語での紹介サイトも数多くあります)。

この美術館はもとは 19 世紀のフランスの大富豪の邸宅で、美術愛好家だったこの富豪が個人で蒐集していた調度品をそのまま、富豪の死後に国立美術館としたものです。19 世紀後半、再開発したばかりのパリの一等地に建っており、吹き抜けの舞踏会用大広間、大理石の階段、細部まで凝った飾りが施された家具、素晴らしい絵画やフレスコ画が多く飾られ、まばゆいばかりの当時の栄華を偲ばせます。当時はルーブル美術館を上回る予算規模だったそうですから、富豪の美術への愛と財力とはとてつもないものだったのでしょう。

この邸宅の「表向き」の表情は大変華やかなものですが、邸の主の私室へと足を踏み入れると、ずっと落ち着いた雰囲気になります。私室を進んでいくと、一番奥の図書室のさらに一番奥の壁に、その絵はひっそりとかがっています。

照明も暗く落とされた部屋に静かに置かれたその絵は、レンブラントの「エマオの晩さん」という作品です。旅の途中、イエスが弟子たちとともに宿で食卓を囲む絵です。レンブラントは同じ主題の作品をいくつか描いていますが、ジャックマール・アンドレ美術館の作品は美術館公式 HP で見ることができます。

(<http://www.musee-jacquemart-andre.com/en/oeuvres/supper-emmaus>)。

「光と闇の魔術師」と言われたレンブラント、この作品も闇の中に光が差して人物が浮かび上がっています。最初に目に入るのは、貧しさの感じられる宿の食卓で静かに寛いだ様子の、イエスと思われる人物の光に照らされた影です。その傍らには同伴者の表情が光ではっきりと照らされています。驚いたように、問いかけるように、イエスに向かって身を乗り出す弟子の表情です。

初めてこの美術館に足を踏み入れこの絵にたどり着いた時、その時から 10 年も前に読んだ聖書の言葉が、私の心のなかにすんと落ちてきました。一緒に旅をしたイエスの姿が見えなくなった後で弟子の一人が言った言葉、「聖書を説明して下さったとき、わ

た私たちの心は燃えていたではないか」(ルカ 24:32)。

大学生の頃、私は乾いたように聖書をむさぼり読んでいたように思います。その頃、オウム真理教によるテロ事件があり、多くの人が狂信的なカルト信者によって殺されたり傷つけられたりしました。当時の報道を見ていると、信者たちは“悪人”ばかりではなく、むしろ真剣に救いを自分と世のために求めた、真面目な人もいたとわかりました。真実を知りたい、自分と人々にとっての生きている意味を知りたいという渴望は、若い私自身が感じていた思いと同じでした。なぜ、テロ犯人たちはおぞましい犯罪に手を染めなくてはならなかったのか、ますます闇に引き込まれるようでした。

初めて聖書を読んでから 10 年後、答えを求めて聖書を読みふけていた大学生の私自身を振り返った時、確かに私の「心は燃えていた」と、パリの美術館のレンブラントの絵の前で思いました。テロへと人を導く教祖や指導者は声高に呼びかけ人の心の弱さを煽って人を操ります。しかし、イエスは私の心からの問いかけを静かに受け止めてくださったのだと、レンブラントの絵を見ながら心に染み入るような感じました。大学生の私を受け止めてくださっただけでなく、エマオで現れて弟子たちと旅路を共にされたように、日本を出てアメリカを歩んだ、私のそれまでの 10 年の旅路のあいだもずっと、そばに旅してくださったのだと、悟らされたのです。

聖書の言葉もイエスの御業も、ずっとあとになってから姿を表わし始めました。不思議なことだと感じます。私の目と心は今も曇っていても、イエスがともに旅していかざるはず、と思いを留めながら、今日の日々を歩みたいと思っています。

2017 年 6 月 16 日 聖学院大学 全学礼拝